“栃木沖積低地”周辺の古墳
―伯仲１号墳の位置付けをめぐって―

秋元陽光[1]

はじめに
1 “栃木沖積低地”
2　前期古墳
3　中期古墳から後期古墳へ
4　後期古墳
5　終末期古墳
おわりに

横穴式石室を蔵する推定 60 mの前方後円墳である栃木市伯仲１号墳の、地域の中での位置付けを考える。伯仲１号墳の地域を従来“永野川流域”と捉えてきたが、東縁に思川、西縁に永野川が流れる“栃木沖積低地”として捉えて、低地東岸と西岸を個別に検討してきた従来とは別な視点を示す。この低地には古墳前期の山王寺大桝塚古墳があり、低地面を挟んだ東側台地上の牧ノ内遺跡との関係も捉えることができる。大桝塚古墳の後、中期には永野川東側低地にある寒川古墳群の鶴巻山古墳に継承される。中期から後期にかけて宇都宮南部から小山市北部へ大形古墳が移行する中で、寒川古墳群の首長墓系列が継続して築造され、低地の東側には野木町野渡古墳群も存在する。

古墳後期は栃木低地に首長墓がなく、周縁台地上に築かれる。低地西側の永野川流域で前方後円墳を中心とした群集墳、東側の思川流域では円墳の群集墳が築造される。永野川流域の長 50-60m 級前方後円墳のうち都賀愛宕塚古墳とオトカ塚古墳は古墳群がある谷を押さえる立地で、これらを統括した存在と考えられる。伯仲１号墳は低地に面し、栃木低地面の下泉古墳群を統括する存在と捉える。古墳終末期の大形円墳である思川東岸台地上の千駄塚古墳は円墳の群集墳である牧ノ内古墳群の勢力伸長とも考えられ、低地西縁部台地に前方後円墳が築かれたこととの差の背景を検討する必要がある。

はじめに

伯仲１号墳は栃木市大平町大字伯仲と栃木市藤岡町大字蛭沼字三蔵に所在する、推定 60 mの横穴式石室を蔵する前方後円墳である。本古墳について 2014 ～ 2017 年にかけて栃木県古墳勉強会により調査を行い、2018・2019 年に事実報告を行った（栃木県古墳勉強会 2018・2019）。しかし、時間的制約から、調査から得られた様々な課題について検討を加えることはできなかった。本稿は今後刊行が予定される総括報告書に向け、本古墳の地域の中での位置付けを考える上での試論として草する。

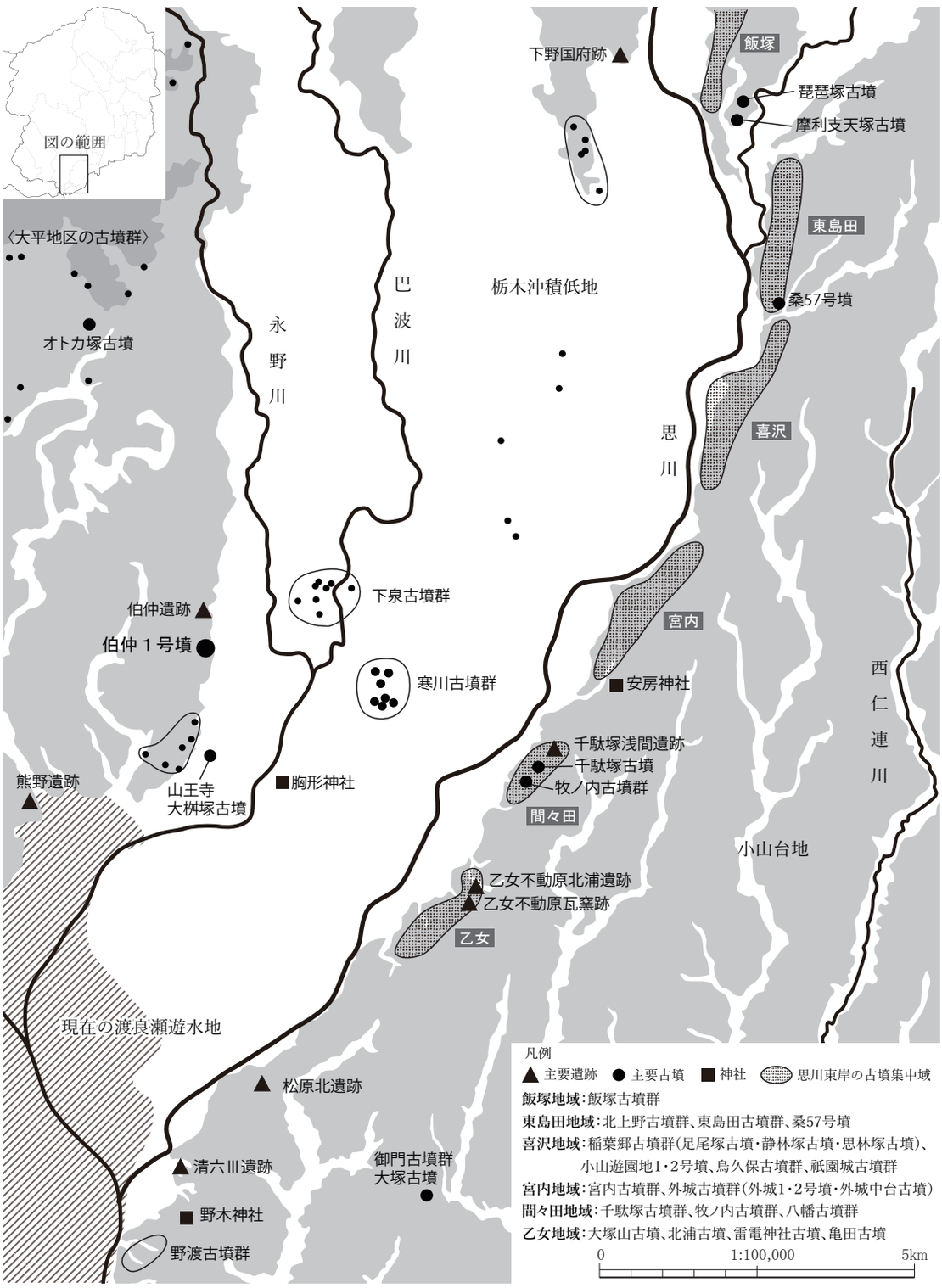
１ “栃木沖積低地”

これまで伯仲１号墳を「永野川流域の古墳」と捉えてきたが、永野川流域をもう少し広い視点で捉えたとき、“栃木沖積低地”（以下　栃木低地）西縁を流れる河川と捉えることができる。

栃木低地は栃木県南部に位置し、東縁には思川、西縁には永野川が流れる低地面である。現状では低地面の大半が水田として利用されるが、部分的に古くからの集落が存在し、複雑に低台地が存在すると考えられる。

この低地には古墳時代前期の山王寺大桝塚古墳、中期から後期前半にかけての寒川古墳群、古代における下野国府などが存在する。このような存在に対し、これまで思川・永野川それぞれの流域という認識により

⑴　日本考古学協会会員・栃木県考古学会会員


図の範囲
〈大平地区の古墳群〉
オトカ塚古墳
永野川
巴波川
栃木沖積低地
下野国府跡
飯塚
琵琶塚古墳
摩利支天塚古墳
東島田
桑57号墳
喜沢
思川
宮内
安房神社
西仁連川
下泉古墳群
寒川古墳群
伯仲遺跡
伯仲１号墳
熊野遺跡
山王寺
大桝塚古墳
胸形神社
千駄塚浅間遺跡
千駄塚古墳
牧ノ内古墳群
間々田
小山台地
乙女不動原北浦遺跡
乙女不動原瓦窯跡
乙女
現在の渡良瀬遊水地
松原北遺跡
清六Ⅲ遺跡
御門古墳群
大塚古墳
野木神社
野渡古墳群
凡例
主要遺跡　主要古墳　神社　思川東岸の古墳集中域
飯塚地域：飯塚古墳群
東島田地域：北上野古墳群、東島田古墳群、桑57号墳
喜沢地域：稲葉郷古墳群（足尾塚古墳・静林塚古墳・思林塚古墳）、
小山遊園地1・2号墳、烏久保古墳群、祇園城古墳群
宮内地域：宮内古墳群、外城古墳群（外城1・2号墳・外城中台古墳）
間々田地域：千駄塚古墳群、牧ノ内古墳群、八幡古墳群
乙女地域：大塚山古墳、北浦古墳、雷電神社古墳、亀田古墳
0
1:100,000
5km

把握（理解）してきた。しかし、両河川に挟まれた低地を中心に古墳の分布を見ると、これまでとは異なる地域相をうかがうことができる。

2　前期古墳

栃木低地において最も早く出現した大形古墳は山王寺大桝塚古墳である。本古墳の築造の背景について、渡良瀬川と思川・永野川の合流地点に近いことがその要因の一つと考える。

渡良瀬川流域沿いには古墳時代前期の主要な古墳が存在し交通の重要な河川であったことは知られるが、思川・永野川流域には顕著な前期古墳は認められない。このような中でこれらの河川が近接する場所に本古墳が築造されたと考えるのである。

本古墳に先行あるいは併行する時期の古墳および集落については、西側台地上の伯仲遺跡・熊野遺跡、低地面を挟んだ東側台地上に存在する牧ノ内遺跡が注目される。特に牧ノ内遺跡では古墳時代前期の方墳（方形周溝墓）23 基、住居跡 16 軒が確認されている。これらの中には明らかに大桝塚古墳に先行する例が認められ、その成立との関係の検討が必要である。また同時期の集落についても、小形古墳と集落の共存、大形古墳との距離的隔絶性などの課題を有する。いずれにせよ、両者をまったく無関係とは捉えることはできず注目しておきたい。

3　中期古墳から後期古墳へ

山王寺大桝塚古墳の築造後、北東側約 3 ㎞に鶴巻山古墳が築造される。両者の位置は、大桝塚古墳が永野川流域の西側台地に近接するのに対し、鶴巻山古墳は低地面のほぼ中央に位置する。両者には一世代程度の時間的間隙が想定され、その間隙を埋める古墳の存在は不明であるが、前方後方墳から円墳へという大形墓の墳形の転換は一様ではなく何らかの事情が考えられる。その事情を現時点で汲み取ることはできないが、栃木低地を治める立場という意味において、大桝塚古墳から鶴巻山古墳にその立場が継承されたと考えておきたい。（注 1）

鶴巻山古墳周辺には寒川古墳群と称される首長墓系列と考えられる古墳が存在した。湮滅した古墳を含め、鶴巻山古墳（円　53 m　5 世紀中）→茶臼山古墳（前方後円　77 m　5 世紀後）→毘沙門山古墳（造出付円墳　32 m　5 世紀末）→三味線塚古墳（前方後円　55 m　6 世紀初）という築造順序が想定される。

この古墳群を含め、5 世紀から 6 世紀にかけての首長墓の動きについては、県内の古墳の動きを見たとき極めて重要な意味を持つ。すなわち、5 世紀中葉に宇都宮市南部に当時最大規模の本格的前方後円墳である笹塚古墳（100 m）・塚山古墳（前方後円墳 100 m）が築かれ、これら勢力が衰退するとともに小山市北部に摩利支天塚古墳（前方後円墳 120 m）・琵琶塚古墳（前方後円墳 123 m）が出現したと考えられる時期と一致するからである。

	東谷	塚山	飯塚	寒川
5 世紀中	笹塚（後円 100）	塚山 (後円 100)		鶴巻山 (円 53)
5 世紀後	鶴舞塚（円 53）	塚山西 (帆立 63)	摩利支天塚 (後円 120)	茶臼山 (後円 77)
6 世紀前	松の塚（円 51）	塚山南 (帆立 58)	琵琶塚 (後円 123)	毘沙門山 (造出 32)
6 世紀中				三味線塚 (後円 55)

（後円：前方後円墳　帆立：帆立貝形前方後円墳　円：円墳　造出：造出付円墳）

対応を示すと表のとおりと考えるが、これを見ると宇都宮南部から小山市北部へ大形古墳が移行する中で、宇都宮南部における墳丘規模の縮小化、小山市北部における突然の大形古墳の出現という状況がみられる。一方、寒川古墳群では墳形・規模の変化はあるが、継続して首長墓が築造され続けた。このことは寒川の勢力は大形墳の移動の中で一定の立場を持ち続けていたことを意味し、場合によっては大形墳の移動という事象に深く関わっていたと推定できる。

なお、併行する時期の古墳群として注意しておきたいのが、野木町野渡古墳群である。本古墳群は全て湮滅しており、調査された古墳も皆無であるためその実態は不明であるが、群内から出土したとされる画文帯神獣鏡や鈴杏葉の存在から、寒川古墳群と併行する時期に古墳群形成がなされていた可能性がある。(注2)

4　後期古墳

後期になると、摩利支天塚・琵琶塚古墳を築いた勢力は北へ約3㎞に位置する吾妻古墳に引き継がれたと考えられる。吾妻古墳においては基壇・前方部主体部・切石使用石室といういわゆる下野型古墳の特徴が出現し、その後河内・都賀地域ではこのような特徴を共有するしもつけ古墳群が形成される。一方、栃木低地面周辺においてはこのような様相はほとんど見られない。

後期の栃木低地周辺の古墳を見ると、首長墓の築造はほぼ見られなくなる。それと置き換わるように、周縁台地上において多数の古墳が築造される。この中で注意されるのが、低地西側の永野川流域において前方後円墳を中心とした群集墳の展開と、東側の思川流域においては前方後円墳が認められず群集墳のみが築造されることである。

永野川流域の前方後円墳については、都賀愛宕塚古墳（50 m？）・オトカ塚古墳（58 m）・伯仲1号墳（60 m）・西方山6号墳（33 m）・圓通寺古墳（30 m？）の5基が知られるが、都賀愛宕塚古墳・オトカ塚古墳・伯仲1号墳は墳丘長60 m前後と推定されるのに対し、西方山6号墳・圓通寺古墳は約30 mと両者の差は明らかである。

大形の3基についてみると、都賀愛宕塚古墳は永野川上流域に位置し、旧西方町西部の谷の開口部に立地する。谷の周縁には46基の古墳の存在が指摘され、これらを統括した存在と位置付けられる。オトカ塚古墳は永野川下流域の西寄りに位置し、旧大平町西山田の三方を丘陵に囲まれた谷部の東南部に位置する。谷の周縁には67基の古墳の存在が指摘され、やはりこれらを統括した存在と考えられる。

このように想定し伯仲1号墳を見たとき、同古墳は栃木低地面に直接面するように立地し、前述した二者が谷部を押さえるように立地するのと異なる。このことから、伯仲1号墳は栃木低地面を統括する存在と捉えておきたい。具体的な統括対象と考えられるのは下泉古墳群である。下泉古墳群は低地面に立地し、確認されている古墳は8基である。発掘調査された5・6号墳の石室は旧地表面を大きく掘り込まず、玄室平面形は長方形を呈する、玄室と羨道を明確に区別する施設（玄門立柱石など）をもたない等の特徴を有する。これらの特徴は県央部に見られる飯塚型・藤井型とされる石室とは異なり、伯仲1号墳との類似を指摘できる。

5　終末期古墳

終末期の大形古墳として注目されるのが、思川東岸台地上に築造された千駄塚古墳である。千駄塚古墳は直径70 m・高さ10 mの二段築成の円墳であり、埴輪を持たず二重周湟をめぐらす。

本古墳の時期については、栃木県南部に展開するしもつけ古墳群との対応から終末期ととらえられてきた。その位置付けには異論はない。しかし、しもつけ古墳群においては前方後円墳（埴輪有）→前方後円墳（埴輪無）

→円墳（埴輪無）という流れの中で説明されるのに対し、千駄塚古墳の周辺には先行する前方後円墳は知られていない。このため、本古墳の築造の背景を従来と同様の理解で説明するのは困難である。

一案として、千駄塚古墳周辺に展開する群集墳である牧ノ内古墳群の勢力伸長と考えることもできる。同古墳群は後期古墳だけでも 40 基以上が確認され、群集墳中としては大型の、直径 40 mクラスの円墳を複数含む。ただしこのように考えた場合、低地西縁部台地上に前方後円墳が築かれたこととの差が際立ち、その背景の検討が必要となる。

おわりに

“栃木沖積低地”を中心に周辺の古墳について述べてきた。この結果、これまで低地東岸と西岸について個別に検討してきた点について、別な視点を提示できたものと考える。無論、検証が必要な事象を多く含むが、今後伯仲 1 号墳の位置付けを考える上での参考となれば幸いである。

本稿は伯仲 1 号墳の調査・整理に参加するとともに、小山市千駄塚浅間遺跡の報告書作成を行う中で得られた考えを基として記した。考えを得る機会を与えてくださった古墳勉強会各位ならびに、作図についても御協力いただいた荒井啓汰氏に御礼申し上げる。

[注]

1　前方後方墳から円墳へという流れを周辺で見ると、足利地域において藤本観音山古墳から勧農車塚古墳へ、河内地域において茂原権現山古墳から上神主浅間山古墳という事例があげられる。ただし、墳系の転換は同一系譜の中での単なる形状の転換とは考えられず、勢力の変更なども予想され一定期間の有力古墳の存続時期の空白が生じることも予想される。

2　野渡古墳群からの出土が伝えられる遺物として、画文帯神獣鏡（古墳不詳）、鈴杏葉･人物埴輪･円筒埴輪（浅間山古墳）がある。これらの存在から、中期後半から後期前半の古墳の存在が考えられる。

[参考文献]

秋元陽光 2016「栃木県赤津川・永野川流域の古墳群」『第 21 回東北・関東前方後円墳研究会大会　群集墳展開の共通性と地域性』関東・東北前方後円墳研究会

栃木県古墳勉強会 2018「栃木市伯仲 1 号墳（長山古墳）調査報告 1 」『栃木県考古学会誌第 39 集』栃木県考古学会

栃木県古墳勉強会 2019「栃木市伯仲 1 号墳（長山古墳）調査報告 2 」『栃木県考古学会誌第 40 集』栃木県考古学会

（個別の古墳・遺跡に関する報告書は略させていただいた。諾とされたい。）